

子どもスポーツ復興計画

—女子に着目して—

立教大学松尾ゼミ A

○伊藤友梨

石垣亮太

高田賢斗

1. 緒言

子どもの体格、体力・運動能力を、昭和 60 年のデータと現在とで比較を行った。結果、体格は良くなっているにも関わらず、体力・運動能力は低下していることがわかった。現在では、運動をする子どもとしない子どもの二極化が進んでいる。特にその傾向は、女子において顕著に表れる。体力・運動能力の低下は、生涯にわたって健康な生活を営む上での基盤を揺るがす問題である。幼児期に行われる運動遊びから、より競技性の増すスポーツへの移行をスムーズにし、長期目標として子どもが成長し大人になるとき、スポーツに親しむ人が増えること、また短期目標としては、子どもにスポーツとの接点をつくり、スポーツのもつ楽しさを伝える「子どもスポーツ復興計画」を提案する。

2. 問題の所在 —進む女子のスポーツ離れ

子どものスポーツ離れについて笹川スポーツ財団の調査(2010)によれば、7 歳時の運動高頻度群(週 7 回以上)は、男子 32.0%、女子 33.0%となっているが、8 歳時になると男子 34.0%、女子 28.0%と差が付き始める。そして 13 歳時には男子 59.0%、女子 39.2%と約 20%も差が付いていた。子どものスポーツ離れは、小学校低学年である 8 歳ごろから表れ始め大人になるにつれてより強くなる。しかし、未就学児に注目すると多くの子どもが運動遊びを盛んに行っている。これは運動遊びがスポーツへとうまく移行できておらず、小学校に上がるとスポーツから離れていく子どもが多くいることを表している。特に女子はその傾向が強く見られる。このため、女子のスポーツ離れの原因を明らかにし、女子スポーツ推進が急がなければならない。

3. 作業仮説 —どうして女子のスポーツ離れが進むのか

スポーツに対する性別イメージが定着しており、男性的イメージのついている野球やサッカーを女子が行った結果、成長するにつれて女子としての自己イメージとそのスポーツが有している男性的イメージとの間で葛藤し、次第にそのスポーツから離れ、最終的にはスポーツ自体から離れていってしまうのではないだろうか。スポーツが有している性別イメージという壁を取り除き、子どもが受け入れやすく性別イメージの少ない『やわらかいスポーツ』を子どもとスポーツとの出会いに位置づけることで、スポーツは男女関係なく行えるものという意識を自然と芽生えさせることができるのではないか。

4. 大学生を対象としたアンケート調査結果からみるスポーツに対する性別イメージ分析

- 1) 対象：大学生 217 名(男性 82 名,女性 135 名)
- 2) 時期：2012 年 7 月 19 日
- 3) 方法：質問紙法を用いたアンケート調査(集合法によって配布、回収を行った。)
- 4) 主なプロフィール
 - 性別：男性 38%,女性 62%
 - 体育会所属：16%,スポーツサークル所属 34%,所属していない 48%,無記入 2%
- 5) 調査結果の概要

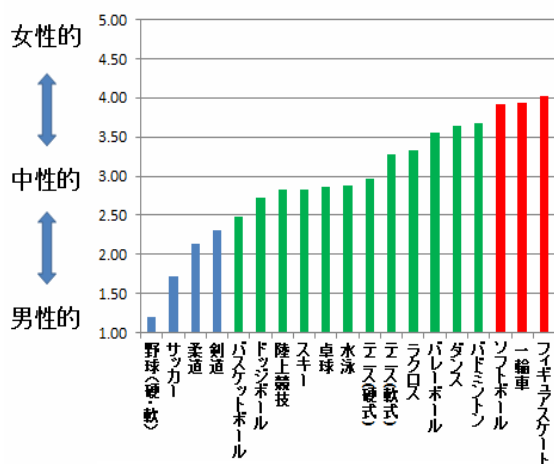


図 1. スポーツに対する性別イメージ

(1) スポーツに対する性別イメージ

調査の結果、スポーツに対する性別イメージが強く定着していることがわかり、大きく男性的スポーツ、中性的スポーツ、女性的スポーツの三種類に分かれている傾向がみられた。その中でも男性的イメージの強く定着しているものがあるのに対し、女性的イメージが強く定着しているものはなかった。つまり、スポーツは全般的に男性的イメージを中心に構成されているのである。

(2) 本人が子ども時代に行っていたスポーツ及び子どもが生まれたらさせたいスポーツ

本人が子ども時代に行っていたスポーツのベスト 5 は、男子、一位：水泳、二位：野球、三位：サッカー、四位：硬式テニス、五位：ソフトボール。女子、一位：水泳、二位：バスケットボール、三位：バレー、四位：バドミントン、五位：硬式テニスという結果になった。

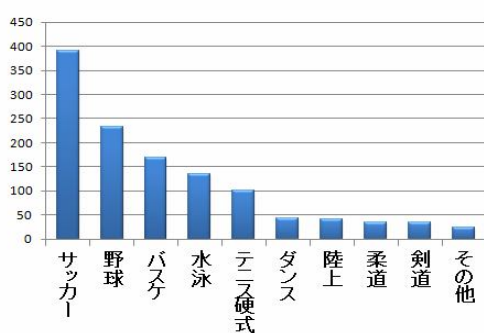


図 2. 男の子にやらせたいスポーツ

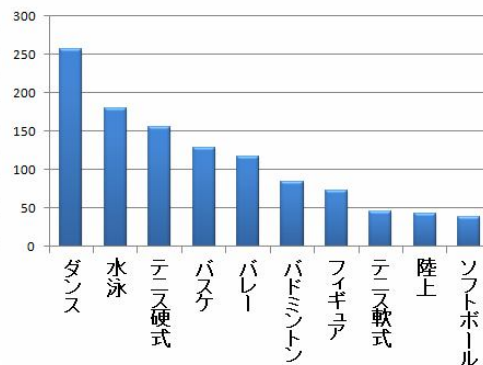


図 3. 女の子にやらせたいスポーツ

子どもにやらせたいスポーツ(複数回答 3 つまで)は一位を 3 点、二位を 2 点、三位を 1 点として合計した点数を示したものである。男の子にやらせたいスポーツは、一位：サッカー、二位：野球、三位：バスケットボールとなった。女の子にやらせたいスポー

ツは、一位：ダンス、二位：水泳、三位：硬式テニスであった。男の子には、男性的イメージを有するスポーツをやらせたいと答える傾向が強く、女の子に対しては、やらせたい種目自体が少なく、中性的イメージを有するスポーツをやらせたいという傾向がみられた。

5. 保育所の事例調査にみる女の子の運動・スポーツ活動の実態

- 1) 対象：千葉県浦安市立入船北保育園
- 2) 日時：2012年8月31日9:00~17:00
- 3) 方法：参与観察及び保育士A氏へのインタビュー調査
- 4) 結果の概要

保育士の意識の中にスポーツという存在は薄く、園児に対して、スポーツに親しむというよりも、楽しく体を動かし発育を目指し保育をしていることがわかった。当日は体操の時間を設けていたが、目的は発育のためであり、スポーツに繋がることを考えての運動は行っていなかった。また、一日園児と過ごし、園児の性差に対する強いこだわりを感じた。園児は、男の子は男の子らしく、女の子は女の子らしくあることが当たり前で、そうでない子に対しては違和感を持っている様子であった。

6. 「保育園児を対象とした『スポーツポルテ』支援」について

* 「スポーツポルテ」…学生ボランティア団体を中心となり行う、運動遊びからスポーツへの移行をスムーズにすることを目的とした支援プログラム。「ポルテ」とは、フランス語で「扉」の意。

1) 支援等を行う上でのポイント

(1) 「運動遊び」と「スポーツ」をつなぐ

この「つなぎ」の部分にやわらかいスポーツを組み込む。運動遊びから一気に競技性を増すスポーツに移行するにあたり、このワンクッションを設けることで運動遊びからスポーツへの移行をスムーズにする。

(2) 「やわらかいスポーツ」の提案

未就学児童の多くは運動遊びを盛んに行っているが、女子に関しては、小学校へ上がってからスポーツへと上手く移行できておらず、自然にスポーツから離れていってしまう女子が多い。そこで、スポーツよりも遊び感覚で行える「やわらかいスポーツ」を行うことで、小学校入学前にその準備をすることができる。

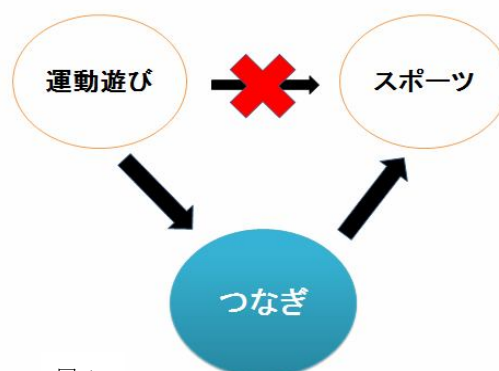


図4.

(3) 「保育所」を主なターゲットとする意義

幼稚園では教育カリキュラムが決められていることと一日の園児の滞在時間が4時間(「幼稚園教育要領」と時間的余裕がないのに対し、保育所では園児の滞在時間が8時間(「児童福祉施設最低基準第34条」と延長保育の時間もあるためカリキュラムに時間的余裕があることから運動・スポーツを導入しやすい。

2) 「スポーツポルテ」支援等の具体的展開

(1) スポーツポルテ支援団体の創設

大学生(プログラムコーディネーター2,3人とボランティア)が中心となり、高校、中学校の総合的学習の時間を担当する教員や生徒によって「スポーツポルテ支援団体」を創設する。また、地域の障がい者活動団体、地域の老人クラブと協力して運営する。

(2) プログラム概要

- ・ 場所：保育所施設(ホール、園庭など)
- ・ 頻度及び時間：日常プログラムにおいては2週間に一度、約2時間行う。特別プログラム(高齢者、障がい者と共に活動する)においては、2ヶ月に一度、約2時間行う。

(3) 具体的な内容

(「やわらかいスポーツを中心に」)
大学生が各対象年齢、保育所施設の環境に応じて種目を選択する。

- ・ 風船バレーボール
- ・ ダンスゲーム
- ・ ゲームドッジ など

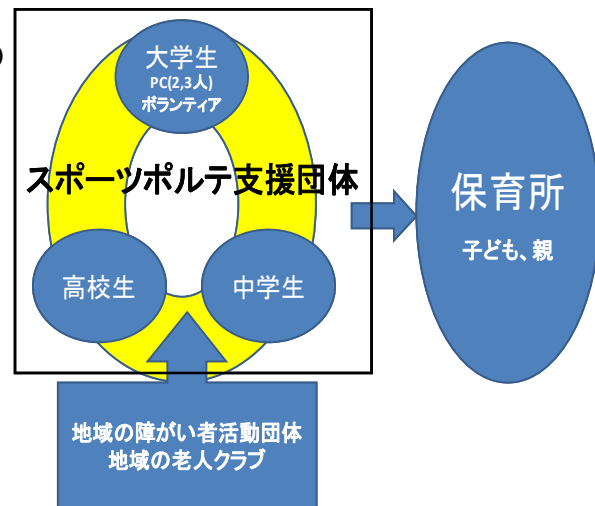


図5. スポーツポルテ支援の仕組み

3) 期待される効果

- (1) 園児とスポーツとの出会いの場を創出→日常にスポーツと接する機会の増加
- (2) スポーツの性別イメージをこえた「やわらかいスポーツ」の発展に寄与する
- (3) 女子のスポーツ環境へのアクセシビリティを高めることができる

7. 参考文献

- ・ 中央教育審議会(2002) 『子どもの体力向上のための総合的な方策について(答申)』
- ・ 厚生労働省(2008) 『保育所保育指針』
- ・ 厚生労働省(2012) 『児童福祉施設最低基準第34条』
- ・ 笹川スポーツ財団(2010) 『子どものスポーツライフ・データ 2010』
- ・ 笹川スポーツ財団(2010) 『青少年のスポーツライフ・データ 2010』
- ・ 文部科学省(2008) 『幼稚園教育要領』